

秋

野口武彦
八卷中作
川作
野口武彦

秋の季節——秋の季節は、一年のうちで最も美しい季節である。秋の空は、青い空と赤い空と、美しい空である。秋の空は、青い空と赤い空と、美しい空である。秋の空は、青い空と赤い空と、美しい空である。

成

秋の季節は、一年のうちで最も美しい季節である。秋の空は、青い空と赤い空と、美しい空である。秋の空は、青い空と赤い空と、美しい空である。秋の空は、青い空と赤い空と、美しい空である。

幻



戯

野口武彦

青い空

秋

九、四、四、九七八

成野口武彦 幻

芥川

戲

秋成幻戯

© 1989, Takehiko NOGUCHI

1989年1月25日 第1刷印刷

1989年2月10日 第1刷発行

著者—野口武彦

装丁者—戸田ツトム

発行者—清水康雄

発行所—青土社

東京都千代田区神田神保町 1-29 市瀬ビル 〒101

(電話) 291-9831 [編集], 294-7829 [営業]

(振替) 東京— 9-192955

印刷所—三協美術印刷

製本所—小泉製本

1093-400341-3978

目次

I ロマン的想像力の系譜

10

II 「引き物語」的方法について

37

言葉の同質異形

構想と展開のバリエーション

61

ザインの黄金

『貧福論』をめぐる一断想

83

III 「悪」とその絶対値

113

歴史の落丁と物語の乱丁

上田秋成の『歌のほまれ』と『駕央行』をめぐる

149

夢の対話篇

春雨物語『目ひとつの神』の幻視界

177

IV

性格悲劇としての「笑い」 上田秋成の初期浮世草子

213

政子淫乱 「物語」の流産をめぐる

249

V

古道信仰と古代幻想 秋成・宣長における二つの国学的世界像

283

あとがき

319

初出一覧

324

秋成幻戲

I

ロマン的想像力の系譜

長いことわずらっていた右の目がやっと少しよくなったと思つたら、今度は左の目が見えなくなつた。寛政十年（一七九八）、上田秋成六十五歳のことである。それはあたかも何かの摂理が、この狷介な文学者に、片目だけはいつも閉じて内界の暗冥を凝視させるためにはたらきかけたかのようだったが、当人の身としてはとんだ不運であつた。この年夏五月、秋成は河内国日下の里くまかの正法寺に杖を曳き、しばらく逗留して病眼を養う。その間に成つた紀行歌文集に、『山霧記』一篇がある。五月二十日頃から七月末までのことを、日次を追つて書き記した文章である。

「秋たちてさすがにさふんくしき夕暮」とあるから、たぶんこれは七月一日の宵だろう。人々が庵にたずねてきて歌を詠んだ。その夜に見たこんな不思議な夢を、秋成の筆はこまかく書き残している。

又、古寺の秋と云ふを思ひめぐらすほどに、ほとく／＼眠りにつく。

夢ごこちに見も知らぬ所にさまよひきぬ。大きな柱うつばりめく物の焼けたゞれたるが、いくら打倒れかさなりあひ、瓦あまたわれ砕かれたるに、したゝかなる石ずゑ石垣なども、焼けて焼けていたう黒みつきたり。芝生草むら木立なども情なく灰うちかづきて、時をもわかぬ見る目の浅ましきよ。虫の声さゝやくばかりも聞えず。こゝいづこならむ、初秋風はさすがに袂さむからねど、いともすさまじさに物悲しうおほゆ。

焼けほこりたる物の下より蝦蟇かはづの大きなが這ひ出て、そこらゆくりかに歩みありく。又同じものの是はすこし小さきが、かなたより歩み来ていきあひたり。

夢の記述はもっと長く続き、この後はすぐ二匹の蝦蟇の対話になるのだが、ここでひととおり引用に区切りをつけよう。一読して、まず驚かされるのは、何よりもこの夢像の鮮明さだろう。夢路をたどってさまよっていったどこかの焼け跡の廢墟。夢に独特の悲哀にみちた孤独感が、この情景にはただよっている。何の音も聞こえない。が、たしかにここには低音の弦のかなでる無声の長い旋律がひびいている。そして、就寝前に思いめぐらした「古寺の秋」がそのままちあらわれたかのように、夢の中の秋成は初秋の風を袂に感じている。「こゝいづこならむ」とつぶやかずにはい

られぬ物寂しい夢境は、しかし、眠りに落ちる前の秋成の現実と、一種ねじくれた連続感を保っているのである。

そこへ突然、蝦蟇の対話が割って入る。その声音もまた、異様に鮮明なのである。「翁」と呼ばれた蝦蟇は、いま夢で秋成がたたずむ場所について、「こゝはそのかみは何の見どころなき山の麓の原野にてありし」と語る。村上帝の御宇、この地には六波羅寺が建てられた。やがて平家全盛の時代には、この野に「きらきらしき館」があった。その後、太閤秀吉のとき方広寺造営のこともあり、それからには、それが六波羅野であることはおのずとわかる。が、いったいこの夢の見者は、いつの時代に身を置いて蝦蟇の対話を耳にしているのだろうか。その声は、ほとんど時間を超えた永遠の一点から聞こえてくるかのように、ぶつぶつと不吉にひびく。「御寺も此度を三たびの災ひにてなん」というのは、世が徳川と改まってから見ればなく取りはらわれたとも聞こえる。ともかく秋成の夢の記述は、「若き者よ、しばしも野とならば鶉うずらとなりて鳴きをれと、まめやかに物語して、又草むらに這ひかくれぬと見て目さめぬ」と結ばれているのである。しかも、この「鶉」の語句は、引用にすぎだつ一首の歌の中で詠まれている。

もしかしたら、夢の中で秋成は、「あなおそろしの世や。かゝるめ見つるは身幸ひなし。いかに成りぬるはてくぞ」と泣く、小さい方の蝦蟇と同化融合してしまっていたのかもしれない。「かかる目、見つるは」と翻読するのは、両眼の不自由をかこつ当時の秋成のこととして、かならずし

もたんなる語呂合わせではない。夢の文法上、しばしば用いられるシンタクスである。だが、それ以上に、右に紹介した夢の奇怪さは、それから覚めた後の、次の一文にこそ現われているというべきだろう。秋成は、一見じつに淡々と、「あした都の使を聞きつれば、うたて見つる夢かなとて、歌はよまず成りぬ」と記している。

「使」字は『秋成遺文』による。これを「便」と見た方がおちつきそうだが未詳。その翌朝、都からはどんなニュースが伝わってきたのか。松浦静山の『甲子夜話』卷六十六の筆録によれば、「洛東大仏殿方広寺、寛政十年七月二日朝、雷火にて炎上」とある。つまり驚くべきことには、秋成はその前夜の夢の中で、方広寺炎上をあらかじめ告げ知らされていた。聞きようによっては、「御寺も此度を三たびの災ひにてなん」という蝦蟇の言葉も、不気味に二義的であった。のみならず、当の秋成は、蝦蟇に教えられるまでは「見も知らぬ所」として、すでに余燼もくすぶらぬその焼け跡に、寂寥を噛みしめながらじっとたたずんでいたのである。

これが偶然的暗合か、生来そなわる予知能力か、はたまた記憶のデータ処理上の前後混信かは、いまは問わない。ただひとつわたしが取らないのは、これを何か秋成の作意であるかのように考える下種のかんぐりである。「古寺の秋」という歌題とこの夢とが、意識と無意識とをとりもつ因果関係の回廊でつながっていたことはすでに見た。が、それに加えてここには、現実と夢という二つの世界にまたがって、出来事がねじれゆがみながらも連続しているといういわば同時性法則がみこ

とに現出している。そして秋成というひと、それを信憑することにかけては生涯でこども揺るがなかつた文学者なのである。秋成の想像力の秘密の一端がここにある。

いったい『雨月物語』の作者ほどの才能の持ち主だったら、自分の想像力のはたらきをどんなふうを感じるものなのだろうか。力量の高下ではなく、事柄はもっぱら想像力の性質にかかわる。一作ごとに架空結構の幻境を織りなし、読者を、美しくも怖ろしい怪異が出没し、この世あの世が交錯する空間へ連れ出してゆく。そこにはたらく想像力という「力」——読者の魂を非現実に拉致するほとんど物理的な力——のありかを、秋成自身はどこに見きわめていたのだろうか。

ある意味でならその答えは、つとに『雨月物語』のよく知られた序文でなかば与えられているともいえる。秋成は『水滸伝』と『源氏物語』の作者を引き合いに出し、その作者の死後の運命に言及した。あまりにも迫真性のある嘘を書いたために、羅貫中は代々啞児を生み、紫式部は地獄に墮ちたというのである。さて、それをマクラにして、秋成は表面の意味では謙遜の言葉とも読めそうな文章を綴る。「余、たまく適鼓腹の閑話有りて、口を衝きて吐き出す。雉きむな雉なき竜戦ふ。自ら以て杜撰づざんと為す。固もとより当まさに信まと謂いはざるべき也」と。

キジが鳴き、竜がたたかう。聖賢の書物の中にも、時として怪異が語られることもあるという意味である。早く寛文六年（一六六六）に刊行された仮名草子、近世怪異小説の元祖とされる『伽婢子おとぎぼし』の序文で、作者の浅井了意は、「総すべて怪力乱神をかたらずといへ共、若止もしむことを得ざるときは、